



京都アニメ事件



臨床心理士 廣田邦義



京都アニメーション放火殺人事件の裁判員裁判が京都地裁で進行中です。多くの人の関心事は動機にあるようですが、今までに動機が解明された大事件はあるのでしょうか。今回は動機に焦点を当てながら非行・犯罪をした人にどのような心理的サポートが出来るかを考えたいと思います。

私は動機を直接的な動機と間接的な動機に分けています。たとえば、中学生が先生を殴った事件の場合、「喫煙を先生から注意されて腹が立った」「先生に対する不信感があった」「同級生の前でいい格好をしたかった」などは直接的な動機です。一方、「父親から暴力を受けてきた」「上級生からの暴力のいじめ」などの被害体験や愛着、虐待などは間接的な動機と考えます。さらに、「ストレスを受けると攻撃的になりやすい」などの性格的な負因があればそれを加えて動機を考えてきました。



しかし、丹念に本人面接を重ねてもここから先はわからないという「ブラックボックス」に迷い込みました。大事件の動機を知りたいのは、多くの人が好奇心だけでなく、事件の衝撃から回復し、安心感を得るための「こころの特効薬」を求めているのかもしれませんが。一番取り組んでいるのはテレビのワイドショーです。評論家になるほどと思われる話をします。ただ、警察から発表される直接的な動機を重視すれば、ささいな動機と重大犯罪という構図になりやすく、事件の本質から離れる可能性があります。間接的な動機は本人の成育歴、家庭環境、性格、知能などを詳細に調べなければなりません。本人と面接できない評論家には難しいと思われます。

最近、私は動機に対する考え方が変わってきました。犯罪は感情に支配された行動なので、動機を論理的に説明すること自体に無理があるのではないかと。推理小説のように犯罪のすべてのプロセスを計画的に実行したという事例は、ほとんどありません。犯罪をするか否かを決断する瞬間は、先を考えない一時的な感情がマグマのように噴出した心理状態に陥っていたと思われます。



人間の日々変化する複雑怪奇で相矛盾する感情の入ったブラックボックスの解明は、永遠のテーマです。京都アニメ事件は社屋を焼くことが目的であったことは明白ですが、動機は本人もよくわかっていないと思われます。本人は裁判終了後もなぜ事件を起こしたのかについて、向き合わなければなりません。本件に限らず、動機は本人が一生をかけて取り組むべき課題のように思われます。



非行・犯罪にかかわる心理臨床家は何が出来るのでしょうか。従来は動機の解明や処遇計画の作成に取り組んできましたが、一歩進めて、本人と同じ目線に立ち、「なぜ事件を起こしたのか」を一緒に考えていく姿勢が求められていると思います。ひとつの事件を徹底的に掘り下げて、自問自答を繰り返すことにより、本人の成長を期待しながら臨床家のなかにも

経験値が蓄積されて真の心理的サポートの実力が身につくのではないかと考えています。

